

# 平成21年度 第3回山形県教育懇話会 委員意見要旨（平成22年3月25日開催）

## 1 平成21年度教育委員会活動の自己点検・評価（2月末現在）について

齋藤委員：

- 「やまがた教育コミュニケーション改革」は、学校・家庭・地域の連携を図り、たいへん対話を重視した活動であり、まさに市民性を育てることに通じると認識されているようだ。

鈴木委員：

- 「児童生徒の体験機会の充実」は、今後も大いに進めてほしい。
- 「食育」の充実のためには、栄養教諭の研修により山形県としての食育教育の理念・目標を共有し合えるような研修会が大切。
- 達成状況については、参加者の数だけではなく、参加者からの感想・評価も示すべき。

國眼委員：

- その取組みが役に立ったのかが報告の文面から見えてこない。
- 「キャリア教育」の捉え方を幅広く捉えてほしい。キャリア教育は、自分が持てる力を他者に提供することによって経済的に自立しひとりで生活を営む力をもった人間になるよう育むことが目的であって、何もインターンシップに限ったことではない。本県なら、キャリア教育とコミュニケーション改革をうまく連動させてはどうか。
- 「キャリア教育」は、行き詰ってしまって困ったという年齢段階になってから支えるのではなくてぜひ、小中高の段階から具体的に組み込んでいただきたい。
- コミュニケーション改革はどんな事を目指してやっているのかというのを、学校だけではなくて地域等にも分かりやすいようにパンフレット等を配付していただきたい。
- 「キャリア教育」は、学校、生徒、地域の社会人の方だけではなくて、そこにぜひ保護者の方も巻き込んでほしい。
- 「キャリア教育」は、単に話を聞くだけではなくて、聞いた後に交流活動などに結びつけてほしい。

柴田委員：

- 事業を実施して、それを受けた子どもたちがどういう風に変化したかを、いじめの数が減った、不登校の数が減った、あるいはPISA（国際学習到達度調査）のレベルが上がったとか、そういうもので捉えていくべき。
- 「教育のゆとり創造」は、先生はなぜ忙しいのかという分析をしておかないと、また先生がこういう「教師のゆとり創造プログラム」の関係で呼び出されたりしてまた忙しくなる。本質的な教育とは何かという話がベースになるべきであり、余計なものは取り払ってあげなくてはならないし、家庭がやるべきことは家庭がやるということを確認していかないと。
- 良い校長先生がいる学校はすごく良くて、子どもたちも良くなる。やはり指導者の人材育成を大きなポイントの中に入れておくべき。
- 工業高校、農業高校、水産高校や、一次産業がものすごく重要なのであり、職業訓練高校をきちっとすることが基本的には山形県の産業を救うこととなる。

板垣委員：

- 今回の資料を見ると、教育行政に躍動感が出て、解決志向的、未来志向的に感じられ、5年後、10年後どう変わっていくのか楽しみだ。
- 教員や教育行政は、問題についてはしっかりと捉えるが、その後どうしていいかが分かっていない。いろいろな事情をしっかりと聞き取ったうえでどう対策を取るか、その答えはやはりコミュニケーションにより生まれるのであり、同じ目線で共感して捉えてそれで一緒に考えてくれる人が望まれている。
- 「教師ゆとり創造アクションプログラム」とか「実行ある1（ワン）プラン」にしても、うまくいった事の中にこそすごく大きなヒントがあり、またその後の希望も持てる。そういう未来志向的な希望が持てるものはエンパードする意味でもとても重要。
- 長期休業して復職した先生から聞き取りをして、何が功を奏してうまく行ったとか、どういう対応が足りなかったかを当事者に聞くことが重要。
- 中高校生の時に長期間不登校していた高校生には、いまさら聞けないようなことに共感的に誠実に耳を傾けて同じ目線でともに考えてくれる人が必要。

## 2 平成22年度教育関連主要施策について

無着委員：

- 「コミュニケーション改革」について、教育委員会ではどういうことを大事にして、学校現場や家庭で継続したものにしていくのかということも含めて、ぜひ今後も、小規模な単位での学習の場をもっていただきたい。
- 「家庭教育」はとても大切である。就学前に心の土台といったものを家庭の中でどれだけ作ってあげられるか。また、幼児教育、幼小連携、小学校と中学校のかかわりといった、大事にしなければならないものを、家庭で親があるいは家族が、一生懸命にやっていくべき。家庭教育もコミュニケーション改革の一つとして、学校に入ったから急に始めるということではなく、もっとアピールしていただきたいし、家庭教育について教えてくれる場がほしい。
- 「教師の多忙化」について、保護者は教師が忙しいということを理解しており、また教師に高い信頼を寄せている。こういったことも「コミュニケーション」にかかわることであり、ぜひ今後もこういった心の通い合う一人ひとり丁寧な関わりをお願いしたい。

内ヶ崎委員：

- 22年度新規事業の「ネット被害防止スクールガード事業」は非常に良い取組み。こういった事業を県で行ってもらえるのは非常にありがたい。

高山委員：

- 地域の中で活動している「いのちの教育サポーター」や、そのサポーターを支える現場などの、いわゆる「現場力」の視点に立つことが重要。また、その地域にあったやり方、今まで現場で活動している方々が継続してやってきたやり方といったものも大事にすべきである。
- 「幼児共育」や「子育て支援」には、教育と福祉の連携・協力が必要。

柴田委員：

- 今のままだと普通高校は基本的にはあまり社会のことを勉強する機会がないことか

ら、普通高校の生徒に対する「キャリア教育」が大切。

- 「山形大学教職大学院への派遣事業」とあるが、「人間力」とか、しぶとい先生を作っていくためには、やはり民間だとかボランティアを2年くらい経験したほうがはるかに重要。

### 3 教育山形「さんさん」プランについて

高山委員：

- 対話重視学習とか共同型学習は「さんさん」プランをより効果的にするので、ぜひ「学校図書館活用教育」を追加してほしい。

齋藤委員：

- 学校は校長を中心にして「さんさん」プランを積極的に活かす工夫をしてほしい。保護者は、授業参観を通して学習意欲とか集中力といった学習態度は目に見えて捉えられるが、学力の実態については見えにくい。「さんさん」プランを実施したためにどれだけ学力が高まったのかとか、全国平均と比べてどうなのか、何がよくて何が悪いのか、あるいは課題・問題といった弱点を解決するためにはどうすればいいのかなどに関心が高い。そこで、校長を中心にして「さんさん」プランを子ども一人ひとりに積極的に活かすための工夫、例えば、「指導法の改善」、「板書の方法」、「子ども理解」などを行うことが大事。そういうことを積極的に実践して、そして子どもたちの学力向上はこうなった、成長したと保護者に随時知らせること。

内ヶ崎委員：

- とても非常にいいプランである。TT（チームティーチング）を行うというのもとても良い。TTは一定の人数により区切るのではなく、たいへんな子どもさんがいるところに行けるようなフリーランスのような教員が配置されると非常にありがたい。
- 担任の先生の学級王国ということではなくて、いろいろな職種、校長先生をはじめ、管理職、養護の先生など、いろいろな人が情報を一元化して、その情報を家庭に返し、情報共有し、連携していったらいいければ、より良いものになる。

無着委員：

- この少人数学級あるいは副担任制については、保護者もたいへん評価している。
- 少人数学級であることの良さとしてあげられる「互いの関心・愛着・信頼関係が深まって学級のまとまりができる」ということが、将来社会に必ず繋がっていく土台ができるものと期待。
- 特別支援を必要とする子どもをはじめとして、こういう関係性の深まりというか思いやりを持ったかわりが大切。

國眼委員：

- 「さんさん」プランは、特に、不登校、別室登校の方たちに対する学習指導には非常に意味がある。別室登校生徒の学習支援は中学校で行うわけだが、小学校から不登校を継続しているケースも多く、小学校5、6年生で不登校になり始めたお子さんへの対応というのも今後考えていただきたい。

板垣委員：

- 「授業改善」については、取組みの方向性はかなり良いと思う。この雰囲気先生

方が、工夫して、試行錯誤して、ものすごく楽しいワクワクするものに捉えていって  
どんどん進めていっていただきたい。

- 過去に不登校をして現在高校生になっている方は基本が分かっておらず、そうなる  
と社会に繋がっていかないというがあるので、高校の不登校経験者に対して基本を  
教えてくれるような対応がほしい。

柴田委員：

- 「さんさん」プランは非常にいい。しかし、世界で本当に自立して生きていける、  
社会で生きていける人間をどうやって作っていくかということが重要であるので、そ  
れを『さんさん』プラン・プラスアルファ』としてやっていただきたい。

板垣委員：

- 授業改革こそが考える力を養うための改革であり、そのためにはファシリテート  
(注：物事を促進すること)する能力が教員には非常に必要。

#### 4 その他

鈴木委員：

- 今の日本の子どもたちは普段から場数を踏んでいない。彼らに最も必要なことは、  
様々な実体験と実感。そして周りの大人からの共感、価値づけ、勇気づけを通して、  
自信や志、誇りや希望を育み、正しい価値観や心の強さ・美しさを身につけさせてい  
くこと。教師の得意分野、専門分野である授業を通して達成しようとするだけではな  
く、授業以外の学校生活、家庭生活、さらには社会教育の分野にも、手法や連携・協  
力をもっと求めるべき。「すっぴたれ」でコミュニケーションが下手、気持ちや考え方・  
価値観が幼い山形の若者でも、適切な機会や体験があれば、自らを磨き立派に成長で  
きる。
- 「学校と地域社会との連携・共同」については、NPO法人とか地域のボランティア、  
公民館、町内会などのほか、地域や企業の横断的な組織、具体的にはロータリークラ  
ブやライオンズクラブ、青年会議所等の組織とも積極的に連携・共同をすべき。各市  
町村の社会教育課はもっとウイングを広げる必要がある。学校は、地域コミュニテ  
ィーの核であるという確固たる自負を持って、家庭・地域・企業と連携・共同を進めて  
ほしい。

柴田委員：

- 昨年山形大学で大学生と県内企業を回ったが、全く話のできなかつた大学生が、最  
後には途方もなく話ができ、コミュニケーション能力が高くなった。

池田座長：

- 特別支援学校の子どもたちも一生懸命やっている。その子どもたちは、人間的なも  
のをもっと求めており、どんどんいろんな人に来てもらいたがっている。
- 子どもの可能性を形にするのは大人。実際、学校現場ではどうやって生徒に接して  
いいかわからない教師がいっぱいいる。教師自身が、そして親自身も、もっと自信を  
持って、愛情を持って夢を語ってほしい。それをリードするのが教育委員会であって、  
いろんな意見があっても、自信を持って、先生方に、そして親に、子どもに、夢を語  
れるようにしていただきたい。